

昨年、東アジアでも国際情勢が緊張の度を強め、安全保障に対する国民の意識が高まった1年だった。そうした中で第38回正論大賞の受賞者に決まったのは、元自衛官で戦闘機パイロットだった織田邦男・麗澤大学特別教授(元空将)。長年、最前線で国防の任に当たってきた織田氏と、ジャーナリストで第26回正論大賞受賞者の櫻井よしこ氏に、自衛隊の根幹をなす公に尽くす精神と、国防を下支えする国民意識のあり方について語ってもらった。(司会 月刊「正論」編集長 田北真樹子)



## 第38回正論大賞

### 織田邦男氏

おりた・くにお 昭和27年生まれ。防衛大学校卒業後、航空自衛隊に入隊。F4戦闘機パイロットを経て、米スタンフォード大学客員研究員、航空幕僚監部防衛部長、航空支援集団司令官などを歴任。平成21年に退官後、東洋学園大学客員教授などを経て、昨春から現職。昨春の叙勲で瑞宝中綬章を受章した。令和3年から産経新聞「正論」執筆メンバー。元自衛官の専門的立場から産経新聞「正論」欄と月刊「正論」で戦争を未然に防止するための防衛力の構築や、日本にとって重要な懸念材料となっている台湾有事などについて、積極的に問題提起している。

# 「利他の精神」今こそ必要

—このたびは「正論大賞」の受賞、おめでとうございます。

織田 身に余る光栄で、重い荷を背負ったような気がしています。先日、櫻井先生に「私がこんな賞をいただいているのでしょうか」と伺いましたら、「後輩の励みになるからもらいなさい」と言われて吹っ切れました。雲の上の

存在だった知的巨人の中での、ただの自衛隊OBの受賞です。私が自慢できるとしたら人生の約半分、35年間を国防の最前線で過ごし、国の守りにあたってきた、唯一それだけです。

櫻井 私は「後輩のためにも」と申し上げましたがもう一つ、織田さんの受賞は自衛隊の先輩たち

のためでもあると思います。

かつて栗栖(りし)臣(みこと)統合幕僚会議議長が「いざ外国の奇襲攻撃を受け、でも首相から防衛出動命令が出るまで動けない、それでは国民を守れない。結果として超法規的な行動をとって守るしかない」と発言した。今、同じ発言をしても何ら問題にはならないでしょうけれど、栗栖さんは当時の金丸信防衛

庁長官に罷免されてしまいました。そうした先輩方の苦しい、悔しい道のりが今まであって、今の日本がある。そこで織田さんが発言されていることは今後の後輩のためでもありますし、先輩方のご苦勞に配慮することでもありましょう。国軍たる自衛隊を担う自衛官の代表として、すばらしい発言をされていると思っています。

## 非核三原則の魔法

織田 ありがとうございます。本紙正論欄に令和3年9月から書き始めて気になるのが、自衛隊O

Bや後輩たちからの「よへぞ言ってくれた」との言葉です。これは「まだ自分たちは発言できない」ということの裏返しでもあり、複雑な心境になります。今でも、軍や核兵器、安全保障に関しては江藤淳氏が言うところの「閉ざされた言語空間」が厳然としてあって、米国では当たり前のように論じられることが言えないのです。

例えば「非核三原則」と聞いたとたんに、何か魔法にかかったかのようにそこから先に一歩も進まない状況がまだまだあります。岸田文雄首相が「私は被爆地・広島の出身だから非核三原則を守る」とおっしゃる。これは論理的におかしいでしょう。非核三原則が日本国民を守るために最適な政策だからこれを守る、ということなら納得しますが、果たして他の選択肢を考えた上での結論なのか。

櫻井 岸田首相が「私は広島の出身で…」とおっしゃるのは核の問題から目をそらした全くおかしな議論です。非核三原則で国と国民が守れるのならともかく、そうではありません。もう一つ、岸田さんは広島のご出身ではありませんが、日本国の首相なのです。そこはきちんと考えていただきたい。

# 正論大賞 対談

麗澤大学特別教授・元空将

織田邦男氏



ジャーナリスト

櫻井よしこ氏

## 専守防衛では国民に犠牲

織田 自由闊達な議論をした上で「やはり日本は総合的に考えて非核三原則でいこう」というのならしいのですが、全く議論なしに決められているのが問題なのです。40年以上前に清水幾太郎さんが著書『日本よ国家たれ―核の選択』で、日本は「被爆国」という特権意識を持っているのではないかと、被爆国だからといってこの国も核攻撃を遠慮したりはしませんよ、と指摘しています。

そうした、考えれば考えるほどおかしなことがまなお通用している。たとえば「専守防衛」という概念です。専守防衛というのは「相手から武力攻撃を受けたとき初めて防衛力行使」するということで、「ここまでならまだいい。国連憲章の考え方もそうですから。しかしそれに続いて「その防衛力行使の態様も、自衛のための必要最低限度にとどめ、また保持する防衛力も自衛のための必要最低限度のものに限られる」となっています。これはおかしい。

一方で「軍事大国とならない」の中には、他国に対して脅威とならないとある。他国に対して脅威とならない必要最小限の軍事力で抑止が効くのか。そもそも「専守防衛」と「軍事大国とならない」は矛盾しているのです。

この矛盾した基本政策を政府・防衛省が堂々と掲げていることに誰も文句を言いません。このたび日本が「反撃能力」を持つことが自公両党の間で合意されましたが、そこでも専守防衛という言葉があまり中身が考えられないままに飛び交っていました。これはおかしい。国民を何としても守る上で、専守防衛という立場を採るならば絶対に戦争を起させないような強力な防衛力を持つ必要がある。誰もそれを言いません。

すね。こちらから攻撃しないというところで、「日本が悪い戦争をした」と反省する国民性の中で専守防衛という言葉がスツと頭の中に入ってきてしまうのでしょうか。けれども、政治家あるいは言論人として説明する責任があったと思うのは、専守防衛は国民が犠牲になるのがまず前提になっているということ。何百人か何千人かの国民が死んで初めて反撃が許されますが、それでよろしいのです。ね、ご家族や友人の犠牲を前提にして初めて専守防衛という政策が成り立つのです、という説明を本来、しなければなりません。

織田さんの役割は、安倍晋三元首相の役割と似ていると思えます。安倍元首相は「台湾有事は日本有事であり、日米同盟の有事でもある」とおっしゃいました。これを聞いて多くの人は「よくぞ言ってくれた」と思ったことでしょうか。核共有を含め核の議論もしなければいけない、また防衛費を国内総生産（GDP）比2%に引き上げるべきだともおっしゃった。われわれが認識し議論しなければならぬボールを投げかけられた。織田さんも同じように、自衛隊の現役の方々が気がつきながら

第301飛行隊長、40歳のころ



翼扱ひされて無視されかねませんから、十分に気をつかって書くようにしているところです。元自衛官としての責任を感じています。先日の本紙「正論」欄に書いたことですが、国際世論調査で「もし戦争が起ったら、国のために戦いますか」との問いに、「はい」と答えた割合が日本は13.2%で、調査対象79カ国中で最下位でした。

私はいま、大学で安全保障について教えていますが、学生たちにとって私の話すことは非常に新鮮に映っているようなのです。世の中では安全保障についてほとんど論じられていませんが、日本を取り巻く国際情勢は厳しく、学生たちも「日本は本当に大丈夫なのか」と思っている。だから私の講義を、目を輝かせて聞いてくれるのです。そして講義の後、学生がやってきて「私はいざとなったら戦います」と小声で言うのです。

も言えなかったことを、世の中の一步先を見て提言されている、そのことに改めて敬意を表したいと思います。

### 安倍氏が投げた球

織田 安倍さんは本当にうまくボールを投げて、波紋を広げられてきたと思います。その点、私は下手にボールを投げるとただの右

織田 大きな声では言えないんです。講義の途中でも拳手して「日本は79カ国中でビリかもしれないけれど、私は違います！」と言ったのが普通ではないかと思うのですが、やはり日本特有の言語空間のいびつさがあるのだと思います。こういうものを一つ一つ打破していかなければならない。

櫻井 それは大きな声で言わないと(笑)。



櫻井 私たちは軍事に疎いということもありますが、そもそも国の存在感が戦後、希薄になっているという問題があるかと思えます。国のために命を投げ出すという発想が途絶えてしまっていて、会社のために頑張るとか、ごちんまりしたところから人生の意義を見いだすようになってしまっている。

織田 米国の第3代大統領トマス・ジェファソンは「最大の国防は良く教育された市民である」と言っていますが、日本の場合は真の教育がなされていない。自衛隊での教育とはどのようなものかと、よく聞かれます。私は「公の復活」ですと申し上げています。いま学校教育や一般社会では「私」優先で、国家や社会の大切さが軽視されています。一方、自衛官が最初に制服を着て宣誓するのが「事に臨んでは危険を顧みず」という利他の精神です。国民のために全力を尽くし、場合によっては自分の命を投げ出すこともあり得る、ということが日教組の教育とは真逆です。それで自衛隊に入ってきた若者は目覚めるのです。

櫻井 すばらしいことだと思えます。もう少し具体例を紹介いただければ。

織田 入隊した隊員は最初に朝夕の国旗掲揚・降下を実践し、そして「事に臨んでは危険を顧みず」と教えられます。実際の活動としても空自の航空救難団のモットーとして「That others may live (他を生かすために)」という文言がありますが、他の人を生かすべく自分たちは頑張る、という教育をいろいろなところで受けるわけです。私がすばらしいと思ったのは、自衛隊のイラク派遣の際に私が2年8カ月、指揮官を務めたときのことです。私の在任中も含めイラク派遣の5年間で、自衛官の事件は1件だけ、それも自衛官が他の車両にはねられたというものでした。不祥事らしい不祥事は一切ありませんでした。

防衛大学校の入校生でも「将来、自衛官になる」と固い信念を持っているのはほんの2割程度です。しかし4年間「他人のため国家のために尽くすこと」をどんなに幸せなことか」と繰り返し教え、それを訓練や実生活を通じて体得した結果として、8割の学生が自衛官に任官します。自衛隊に入ってくるのが特別な人であるわけでは

ありません。きちんとした社会人を育てる教育を行っているだけなのですが、一般社会ではそれが欠けている、ということでしょうか。いのだらうと思っています。



対談に臨むジャーナリストの櫻井よしこ氏と元戦闘機パイロットの織田邦男氏 一東京都千代田区国家基本問題研究所 (飯田英男撮影)

が自然に一体化しているんですね。

父が90歳になったとき、初めて「実はワシは戦艦大和を造っていた」と聞かされました。父は海軍呉工廠の技官で、戦艦大和の第二砲塔の製造に携わっていたそうですが、なぜ今まで黙っていたのか聞くと「国と約束したからだ。わしももう長くない。もうええじゃろう」と。国と約束したことだから、戦後生まれの私にもずっと言わなかった、ということだったのです。仰天でした。

父はパイロットだった弟を戦地で失っており、90歳を過ぎても九段下の駅からつえを突いて坂を上って靖国に参拝していました。父は、靖国神社を毛嫌いする人たちが何を考えているのか、最後まで理解できなかったようです。人間の究極の欲望は、天寿を全うすることだと思っています。その欲望を投げ捨てて国家のために命を捧げた人に対して生きている者が礼を尽くすのは、ごく当然のことでしょう。

### 靖国に思いが凝縮

櫻井 そうした人たちの思いが凝縮されているのが靖国神社といえますが、その靖国神社がないがしろにされている現状は、非常に恥ずかしいことですね。

織田 国家の恥ですし、精神のメルトダウン(溶解)を引き起こしています。個人と国家が一体となっているからこそ国家が繁栄するわけですし、国家のために尽くした人をきちんと追悼してこそ国家は成り立つものです。

櫻井 私の母は明治末年、農村の生まれで、もちろん軍人でもありませんでしたが、その母の中にも国家と個人は一体化していました。終戦時にベトナムから、両親は生まれたばかりの私と兄を連れて、一文無しになって引き揚げ船に乗って帰ってきました。母が東京・上野に行ってみると、あたり一面は焼け野原だった。後年、母に「そのとき、どんなことを考えたのか」と聞いたのですが、母は「お国はこの先、大丈夫なのだろうかと考えた」と答えたのです。一文無しで満足に住む家もなかったのに、家族の生活は何か頑張ればやっつけていけるが、破壊され尽くした祖国のことの方を心配したのです。

織田 われわれは戦中派の両親に育てられました。私が防衛大学校に進学するとき、母は「お国に捧げた身だから、頑張らなさい」と言うのです。戦闘機パイロットになったので、本当は心配で仕方なかったはずですが、それを私は決して言わなかった。

近年は、そんなことを言うのは悪だといわんばかりの教育がなされています。「命懸けで頑張れ」と公に教育できるのは、今や自衛隊だけかもしれません。

# 日本は覚醒して憲法改正

日本人は古来の伝統に根差す「利他の精神」というDNAを持っているはずですが、それが学校教育で封印されている。そのDNAを芽生えさせるわけです。他人のため社会のため国のために尽くすことがこんなに幸せで心地よいものだと分かった瞬間に、隊員の目の輝きが違ってきます。災害派遣に出ていく自衛官の目の輝きを見てほしい。



### 第26回正論大賞

## 櫻井よしこ氏

さくらい・よしこ 昭和20年、ベトナム生まれ。ハワイ大卒。ジャーナリスト。アジア新聞財団「DEPTH NEWS」の記者、東京支局長、NTVニュースキャスターなどを務めた。平成19年に国家基本問題研究所を設立、国防、外交、憲法、教育、経済など幅広い分野で提言を行っている。著書に『迷わない。』『気高く、強く、美しくあれ—日本の繁栄は憲法改正からはじまる』など。大宅壮一ノンフィクション賞、菊池寛賞など受賞。日本再生に向けた精力的な言論活動が高く評価され、第26回正論大賞を受賞した。

対談の詳細を掲載した月刊「正論」2月号は好評発売中。

櫻井 ウクライナ侵略を受けて、日本の防衛論議は一気に変わりました。たしかにドイツと比べれば日本の覚醒は遅いけれども、必ず覚醒して、憲法改正も成し遂げる、それをやらないような政治家は選挙で退場したく、令和5年をそういう年にしていきたいと思えます。(構成 溝上健良)

櫻井 ウクライナ侵略を受けて、日本の防衛論議は一気に変わりました。たしかにドイツと比べれば日本の覚醒は遅いけれども、必ず覚醒して、憲法改正も成し遂げる、それをやらないような政治家は選挙で退場したく、令和5年をそういう年にしていきたいと思えます。(構成 溝上健良)

# 政治と軍事 関係充実図れ

領」ですが、2月24日の開戦の10日前までは、すべてを交渉で解決すると表明し、防衛力の強化をサボっていたのです。そういう意味で、決して英雄とは言えません。ウクライナの教訓に学んで、日本は戦争の抑止にお金をかけるべきでしょう。今後5年間の防衛費総額が妥協の産物で43兆円になったと言われていますが、抑止のためなら5年で50兆円かけても実は安いものです。ウクライナの復興

——ところで、いまの自衛隊に足りないものは何でしょうか  
織田 自衛隊はこれまで十分な予算がない中で身を削ってきただけに、気力だけで仁王立ちしている「弁慶」のようなもので、後方・兵站部分が圧倒的に欠けています。現状の自衛隊はいわば「張り子の虎」状態なのです。

櫻井 安倍元首相も以前「日本

には継戦能力がない」とおっしゃっていました。7年8カ月も首相をされた方が公の場でそうおっしゃったことの深刻さを、政府全体で受け止めねばなりません。自衛隊に足りないものは多々あります

が、それは突き詰めれば政治の責任です。政治と軍人との意見交換を常にしっかりと、首相の近くには常に軍人がいるような仕組みをつくる必要があるでしょう。政治家は軍事を知らずして正しい安

全保障政策を立てることはできないだけに、政軍関係の充実を図らねばなりません。  
織田 ウクライナのゼレンスキー大統領は今でこそ「戦う大統領

には1千兆円以上かかるとも言われています。抑止に効果がある、台湾有事を防げる可能性があるものには全部、お金をつぎ込むくらいのことをやってもいい。  
今年には台湾有事が起こるかもしれないと米海軍作戦部長も言っており、ブリンケン米国務長官も台湾有事は予想より早いかもしれないと発言しています。いったん戦争が起きてしまえば大変なことになる。危機を未然に防ぐ者は英雄になれない、と言われますが、国家に英雄はいらないのです。いま批判を浴びてもともかく十分な防衛予算を確保して、結果的に戦争を起こさせないほうがよほど安上がりで安全なのです。